

若手教員支援サイト

学級担任のまなざし

Vol. 01-48

R2.6.8 [Mon] - R2.8.31[Mon]

Okayama Prefectural Education Center

学級担任のまなざし 01

Okayama Prefectural Education Center

R2.6.8 [Mon]

「言葉を添える」

ある小学校を訪問し、授業参観をしていたときのことで
す。

算数の授業でした。担任の先生がプリントを配っていました。縦列の一番前の児童に、列の人数分のプリントを渡しました。そのとき、担任は小さな声で「どうぞ。」と言って渡しました。渡された児童は「ありがとうございます。」と小さな声で言って、受け取りました。そして、後ろの友達に「どうぞ。」と言って渡しました。

次の児童も「ありがとう。」と言って受け取って、後ろの友達に「どうぞ。」と言って…。これを一番後ろまで繰り返していました。どの列の児童も小さな声で、同じようにしていました。

「どうぞ。」「ありがとう。」という言葉がとても自然でした。「どうぞ、と言わなくっちゃ」とか「ありがとう、って言う決まりになっているから」というのではなく、ごく当たり前のように、そうした言葉を発しているように感じました。ちょっとした言葉を添えると、教室の雰囲気は温かくなります。

小さなことですが、しっかり指導されていたことがうかがえます。最初は担任の働きかけがあったのですが、毎日の積み重ねの結果、良い振る舞いとして児童に身についたのだと思いました。

「さり気ない行い」

ある小学校を訪問していたときの事です。4時間目の授業が終わり、しばらくして、給食中のある一年生の学級を訪れました。そのときの出来事です。

「ガシャン！」

ある男子の水筒が倒れ、机や床にお茶がこぼれました。
(あっ！大丈夫かな？ 手伝おうか)

そう思った瞬間、周りの友達四人がさっと席を立ち、ベランダに行きました。四人は、ぞうきんを片手に戻ってきます。そして、担任の先生と一緒に、こぼれたお茶を片付けていきます。みるみるうちに片付けていきます。あっという間に元通りになり、手洗い場できれいに手を洗った後、何事もなかったかのように、再び、みんな食べ始めました。

行い自体は小さいことですが、とても印象的な出来事でした。誰に言われたわけでもないのに、自分から進んで動いているところがすばらしいと感じました。担任が「手伝って。」と言ったわけではありません。自分で考え、判断したのです。「やってあげているんだぞ。」という感じはなく、ごく自然でした。

担任の先生は、四人の児童のそばに行って、「ありがとう。」と言いました。ほめるのではなく、感謝の言葉で思いを伝えていました。すばらしい指導だと感じました。

学級担任のまなざし 03

Okayama Prefectural Education Center

R2.6.10 [Wed]

「ていねいさを大切に」

ある教室に「ていねいに取り組もう」というフレーズが掲示されていました。担任の先生からのメッセージのようでした。その先生に話を聞きました。

「先生は、丁寧に取り組むことを大切に指導されているのですか。」

「そうですね。経験的にですが、物事を丁寧にする子は、学年が上がるにつれていろいろな分野で伸びていくように感じています。」

「勉強でもそうですか。」

「そうですね。例えば、線を引くときには定規を使い、消しゴムを使うときは丁寧に消すように指導します。筆算では位をそろえたり、理科の観察では詳細にスケッチしたりします。何より、文字は丁寧に書くように言います。」

「勉強以外でもそうですか。」

「そうですね。例えば、家庭に持ち帰るプリントを配るときも、最初の頃は、角と角をきちんと合わせて折ることを徹底します。掃除時間に雑巾を使った後、流して丁寧に洗い、パツと広げて、物干し棒に干すように指導します。席を立つときには、いすを入れるように指導します。」

「いろいろあるのですね。」

「給食の時の食器の戻し方、脱いだ服のたたみ方、靴箱への靴の入れ方など、様々な場面で指導していれば、習慣化し、意識しなくてもできるようになります。子どもによっては時間がかかるときもありますが、粘り強く指導し続けることが大切です。」

掲示するだけでは子どもは変わりません。担任の指導があるから変わるのです。

学級担任のまなざし 04

Okayama Prefectural Education Center

R2.6.11 [Thu]

「縁の下に光を当てる」

異学年交流活動を終えた男子が、「あー、疲れた。」と言いながら教室に戻ってきました。「先生、リーダーって大変じゃなあ。」とぼつりと言います。6年生担任には、児童の気持ちがよく分かりました。年度始めは、入学式の準備や片付けに始まり、児童会活動の準備や進行、委員会活動や通学班での下級生の世話など、高学年児童にとって特に忙しい毎日です。担任は、児童の気持ちを聞きながらも、高学年としての活躍を期待して、教室の全員に思いを伝えました。

「どうして自分たちばかりが…」と感じる人もいるかもしれませんが。行事が盛大に行われる時には、その前後に地味な仕事があるものです。下級生がスムーズに活動できるように準備をしたり片付けをしたりしても、その姿は下級生には見えないことが多いので、そのような気持ちになるのもよく分かります。

でも、思い出してほしいのです、みなさんが1年生だった頃を。みなさんが安全に登校できたのはなぜでしょう。うさぎが元気だったり、石けん液がいつも満タンだったのはなぜでしょう。知らないところで、当時の上級生の支えがあったはずです。目立たないけど、陰でしっかり仕事をしてくれていたのです。みなさんは、そうしてこの学校で大きくなったのです。

次はみなさんの番です。仕事をして誰の目にもとまらず、ほめてくれないかもしれません。しかし、少なくともこの教室では、お互いのがんばりを認め合いましょう。

高学年の児童が学校のためにがんばっている姿は、他学年にはなかなか見えにくいことがあります。担任として児童の姿をしっかり見つめ、気持ちを受け止め、「がんばっているね、ありがとう。」と、思いを言葉で伝えるよう心がけているとのことでした。

学級担任のまなざし 05

Okayama Prefectural Education Center

R2.6.12(Fri)

「心の拠り所」

ある先輩教員がいました。教職経験の長い先生で、その年は1年生を担当していました。

始業前、その先生に用事があり、教室を訪ねました。その日は朝から暑い日でした。既に、1年生が数人、登校していました。一人の児童が「おはようございます!」と言って、教室に入ってきました。「おはようございます。」近くにいた私があいさつをしました。「おはようございます!」とあいさつを返してくれました。担任の先生も後に続きました。「おはようございます。よく来たね。」「うん! やっと着いた!」私は、(えっ?)と思いました。(「よく来たね」って?)

その日の放課後、先生に「よく来たね。」のことを尋ねました。すると、こう言われました。「だって、今日、朝からとっても暑かったでしょ。1年生の子が30分以上かけて、ランドセルを背負って歩いてくるだけで、すごいわって思わない? 来て良かったって感じられる教室にしくっちゃね。」「…そう考えるのか…」と思いました。

その先生が中学年を担当していた時のことです。

音楽の授業は専科の担当で、授業を終えた児童が次々と担任のいる教室に戻ってきます。廊下を歩いていた私に、こんな言葉が聞こえてきました。「おかえり!」「ただいま!」私は(「家でもないのに?」)と不思議な感じがしましたが、児童にとっては、教室が家のような居場所なんだと思いました。

「子どもたちの居場所を!」と大上段に構えなくても、普段の小さなところから心の拠り所をつくることを大切にしている様子がうかがえました。

「バトンをつなぐ意味」

新型コロナウイルス感染拡大防止のため延期になっていた運動会が、県内でも少しずつ開催されるようになってきました。制約のある中での実施ですが、全力を出している姿からは、子どもたちの前向きな気持ちがよく伝わってきます。

ある学校で、運動会を間近に控え、体育の時間にリレーの練習をしていました。

あるチームが、バトンを落としてしまいました。しかも、バトンがコロコロと転がって行ってしまったため、拾うのに時間がかかりました。「あ～あ」というため息も聞こえてきました。前を走るチームとは、半周近い差がつきました。

でも、そのチームには、諦めない子どもたちがいました。バトンを受け継いだ子どもが、全力で追い上げていきます。ぐんぐんと差が縮まっていきます。「がんばれっ！」子どもたちの大きな声援が続きます。バトンはしっかりとつながっていきます。

そして、ゴールしたときには、あんなに大きかった差が、わずか数メートルにまで縮まっていた。最終的に、最下位のままでしたが、それでも、何か清々しいものが感じられました。

バトンは、目に見えるバトンばかりではない気がしました。

担任の先生は、一位になったチームをたたえました。学習のめあてを意識していた別のチームもたたえました。そして、先ほどのチームも取り上げて力強くほめました。そして、「リレーで、バトンをつなぐ意味って何でしょう。100メートル走とはどこが違うのでしょうか。」と投げかけて授業は終わりました。

みなさんだったら、どう考えますか。

学級担任のまなざし 07

Okayama Prefectural Education Center

R2.6.16[Tue]

「心の在り方次第で」

ある学級での道徳の授業です。担任が授業の終末で、ある住職さんがされていた話を紹介しました。

「ある人が地獄に行ったというのです。一面の花畑。川もきらきら輝いて、魚も泳いでいます。鳥もさえずり、本当に美しいところなのです、地獄なのに。

立派な建物に入ると、たくさんの方がいました。みんなきれいな着物を着て、食卓を囲んでいます。豪華なごちそうが並んでいます。でも、ちょっと変なんです。『もっと食べたい、おなかがすいた』といううめき声が聞こえるのです。よく見ると、みんな手に1メートルの長さの箸を握っているのです。そして、一生懸命にその箸で食べようとするのですが、箸が長すぎて口に届かないのです。だから、『もっと食べたい』と言っていたのです。」

「次に案内されたのは、天国でした。先ほどの地獄と全く同じような風景でした。ただ、地獄と違うのは、みんな料理を食べているのです。そして、幸せそうなのです。」

子どもたちは担任の話を聞きながら、ニコニコとうなずいていました。「わかった!」という声も上がりました。「天国の人は、自分で食べようとしていたのではなく、お互いに食べさせていたのでは」という発言もありました。

「助け合い、支え合う」ことが天国であるというのなら、天国や地獄というのは一人一人の心の中にあるのではないかと思います。そして、自分の心の在り方次第で、心は天国にも地獄にもなるのだと思いました。

授業のまとめをした後、担任が尋ねました。「住職さんの話からすると、この学級は天国でしょうか、地獄でしょうか。」

「やる気を引き出す話」

担任している子どもが、鉄棒の技がなかなかできなくて元気をなくしていたり、なわとびの技が思うようにできなくて諦めてしまったりしていたとき、ある先輩の先生は、いつも子どもたちに「努力のつぼ」の話をしてあげていました。

人が何か新しいことを始めようとしたとき、神様から「努力のつぼ」をもらいます。また、今までできなかったことに挑戦しようと思ったときにも、神様から「努力のつぼ」をもらいます。

そのつぼには、いろいろな大きさがあって、どんな大きさのつぼをもらうかは自分では決められません。しかも、そのつぼは、目に見えないのです。

つぼをもらった人が、そのつぼに一生懸命「努力」を入れていくと、「努力」が少しずつたまっていきます。そしてある日、「努力」がいっぱいになって、つぼからあふれ出すのです。その時初めて、もらったつぼの大きさが分かるのです。つぼの中に「努力」を入れ続けていれば、いつの日か必ず、できなかったことができるようになるというのです。

でも、入れても入れても簡単にはあふれないので、途中で「努力」を入れるのをやめてしまう人がいます。また、どのくらい入ったのか途中では分からないので、不安になって、入れる「努力」を小さくしてしまう人もいます。

しかし、どんなに大きいつぼであっても、必ず、あふれ出す日がきます。あふれないつぼはありません。大丈夫です。

その先生の周りでは、いろいろな場面で、子どもたちの「今、どのくらい入ったかなあ」「もうすぐ、あふれるかなあ」「先生！今日、あふれたんだね！」という声がよく聞かれました。子どもたちは、この話にずいぶん勇気づけられているようでした。

「一緒にやるからみえること」

学級担任は日々忙しく、宿題やプリントの丸付けの時間もなかなかとれません。

ある担任の先生は、掃除時間にも子どものノートの丸付けに励んでいました。時々子どもたちの掃除の様子を見るのですが、おしゃべりをしている子どもたちが気になります。

「掃除中は、おしゃべりはしない約束でしょ。」とある二人を注意すると、いつも「はい」と言って悪びれた様子もなく、また掃除を続けるという繰り返しの毎日でした。

そんなある日、仕方なく先生もその子どもたちのそばで、一緒に掃除をすることにしました。二人は普段よりも張り切ってほうきでゴミを掃いています。先生も一緒になってがんばっています。

2、3日続けて教室の様子を見てみると、とても丁寧に、黙々と手際よくゴミを集めている子どもの姿が目に入りました。また、誰に言われたわけでもないのに、汚れたバケツの水替えをしている子どももいました。雑巾をしぼり、きれいに揃えてかけている子どももいました。

先生は、はっとしました。教卓でノートの丸付けをしている時は、おしゃべりをしていた二人にばかりに気をとられ、あたり前にがんばっている子どもたちの姿に目が向いていなかったことに気付いたのです。

子どもと一緒に掃除をやることで、あたり前にがんばっている子どもたちの姿が見えてきたのです。これからは丸付けをする時間を工夫し、できるだけ一緒に掃除をしようと思いました。

学級担任のまなざし 10

Okayama Prefectural Education Center

R2.6.19[Fri]

「問いかける」

一年の間には、学級が好調の時もあれば、不調の時もあります。どんなに力のある教員の学級にも、波はあります。場合によっては、担任として、厳しいことを子どもたちに問いかけなければならない時もあります。

学校は、何をするところでしょう。計算の仕方を学び、漢字の読み書きができるようになること、友達と学び合い、自らの課題をもって探究すること、学び続ける意欲をもつことなどは、もちろん大切なことです。それら一つ一つがみなさんの未来にとって必要な能力だからです。

それと同じくらい大切なことが学校で行われています。それは、ヒトが人間になるということです。人間としての優しさや温かさ、強さや細やかさをもつようになるということです。

しばしば約束を破る人を、あなたは本当の友達として認めますか。自分勝手な人を、あなたは本当の友達として認めますか。強い友達には従って、弱い友達には厳しく接する人を、あなたは本当の友達として認めますか。

勉強が苦手でも、約束を守り、公平で、陰日向のない人を友達に選ぶのではないですか。運動が苦手でも、困っている友達に手を差し伸べたり、目立たない仕事を黙々とやり遂げている人を友達として選ぶのではないですか。

相手に求めるのなら、自分自身もそうあるべきです。

問われているのは、あなた自身の発している言葉です。あなた自身の友達との関わり方です。その基になっている、あなた自身の意識です。

学級担任のまなざし 11

Okayama Prefectural Education Center

R2.6.22[Mon]

「ほめること」

ほめられることで子どもは伸びるとよく言われます。

ある3年1組担任の先生も、クラスの子どもたちががんばっているところや良いところを日々見つけては、「すごいなあ。」「がんばっているね。」とほめるようにしています。年度当初は、嬉しそうな顔をする子どもが多かったのですが、次第に反応が弱くなってきていることを感じていました。

ある時、校長先生から「3年1組の靴箱がきれいに揃っていて、とても素晴らしい。」と言われました。担任は、早速帰りの会で「校長先生が、3年1組の靴箱がきれいに揃っていて素晴らしいと誉めていました。」と伝えました。すると、子どもたちから「やったあ。」と歓声があがりました。中には「先生もうれしい?」と言ってくる子どももいます。次の日から「先生、靴そろえてきたよ。」と報告する子どもが出てきました。

先生は、子どもたちの反応がとてもよかったことや、その後も毎日靴箱の様子を伝えに来てくれる子どもがいることから、同じことでほめるにも、ほめ方が大切だと感じるようになりました。

先生は数人の子どもたちの前で、ある子どもを取り上げ、「なんか最近、すごく自主学習がんばっているなあ。」と聞こえるようにつぶやきました。

その後しばらくして、クラスの中で自主学習をがんばる子どもが増えてきました。ほめられた子どもも、自主学習はもちろん、進んで発表する姿が見られるようになりました。

学級担任のまなざし 12

Okayama Prefectural Education Center

R2.6.23(Tue)

「一人一人の名前を呼ぶこと」

ある教員は、となりの先輩教員のクラスが気になっていました。自分のクラスと比べると、そのクラスはいつも明るく元気があり、どの子も自信をもって発言したり、活動したりする姿が見られて、「何が違うのかな」と感じていました。

自分のクラスにも活動的な子がいて、全体的に明るく元気があり、決して大変な状況ではありません。先輩教員からもよくアドバイスをもらい、授業などで同じような指導をしているつもりです。子どもも担任も違うので、違いがあるのは当たり前なのですが、それでも何か違いを感じます。それがどうしてなのか、わかりませんでした。

6月になり、そのクラスを1週間ずっと参観することができました。授業では、どの子もみんな何かしら発言したり、自分から動いたりして活動的でした。自分のクラスを思い浮かべると、賑やかさは同じですが、そのクラスには、全く発言しない子や、注意が散漫なままの子がいないことに気が付きました。

そこで、担任の動きを注意深く観察してみたところ、例えば、「かんださん、はい」と言ってプリントを手渡していました。「おはよう、かずひろさん」、「ちなみさんはいつもロッカーをきれいにしているね。」、「宿題がんばったね、けいこさん」というように、必ず子どもの名前をつけて声掛けをしているのです。些細なことですが、一人一人の名前をつけることで、その子どもとの距離が縮まり、大切にしてくれていると感ずるのでした。そんな教員の振る舞いに、子どもたちは感化されるのです。

このことに気付いてからは、子ども一人一人を認めることこそ、学級担任の責任だと思えるようになりました。

学級担任のまなざし 13

Okayama Prefectural Education Center

R2.6.24(Wed)

「子どもの良いところを見つけ、表現すること」

教員となって間もない頃は、「ちゃんとさせなくてはいけない」という思いが強く、子どもの「できていないところ」ばかりが目につき、それを正すことが最も大切な指導であると思いがちです。

ある担任は、四月に子どもたちと出会った後、すぐに名前を覚えることと、一人一人の良いところを多く見つけることに力を入れます。名前を覚えることは数日で終わりますが、良いところを見つけることは一年間続きます。それを記憶するだけでなく、毎日記録に残します。もちろん毎日全員を記録できるわけではありませんが、少しずつ積み重ねていくと、子どもの努力や個性が浮かび上がってきます。また、「最近この子の良いところを見つけしていないな」と、顧みることもできます。

担任の大きな役割の一つに、「子どもの良いところをその子に代わってアピールすること」があります。帰りの会などで良い行いをした子を取り上げることで、集団の中でその子の良さが認められていきます。保護者に向けても同様です。家庭訪問で、子どもの良いところを伝えてくれると保護者は嬉しいものです。後で、「こんなことができたんだって、先生言ってたよ」と言われると、子どもは直接褒められるより嬉しいかもしれません。

学期末には、個人懇談や通知表の所見など、子どもたちの良いところを担当がアピールする場があります。それらは子どもたちの「成長の足掛かり」となります。日々、子どもたちの良いところを見つけ、表現できるよう心がけることが大切です。

学級担任のまなざし 14

Okayama Prefectural Education Center

R2.6.25(Thu)

「3匹のかえる」

ある小学校の低学年教室の壁面に、3匹のかえるのイラストが掲示されていました。かわいい3匹のかえるで、それぞれ名前がついていました。「かんがえる」「まちがえる」「みちがえる」という名前です。名付け親は、もちろん担任。それぞれの名前には、子どもたちへの担任の願いが込められていました。

まず、「かんがえる」。これは「考える」子で、自分の頭で考える子どもに育ててほしいという願いです。学習場面だけではなく、友達との関わり方や生活場面でも同じです。人に言われたことをそのとおりにやってみる素直さも大切ですが、人に言われなくても自分で考えようとする気持ちも大切です。

次に、「まちがえる」。これは「間違える」子で、たくさん間違いや失敗を経験しながら伸びてほしいという願いです。自分で考えると間違えることもたくさんありますが、人類が多くの失敗を積み重ねながら科学を進歩させてきたように、子どもたちも間違いや失敗を恐れず、何事にも前向きに挑戦してほしいという思いです。

最後は、「みちがえる」。これは、「見違える」子で、他の友達に対して自分はどうかと比べるのではなく、昨日の自分より少しでも成長しようとする子どもに育ててほしいという願いです。たとえ小さなことでも、一週間前にはできなかったことができるようになったという成長に喜びを感じる子どもは、きっと自分に自信が持てるようになります。

担任は、育てたい子どもの姿を子どもたち自身が普段から意識できるように、分かりやすいキャッチフレーズの形で教室に掲示していました。

学級担任のまなざし 15

Okayama Prefectural Education Center

R2.6.26(Fri)

「小さな変化に目を向ける」

「おはよう。」「おはようございます。」教室で子どもたちを迎え、朝のあいさつをする、それが先生の日課です。子どもたちとあいさつをすると、一日を元気に過ごすエネルギーをもらえる気がするそうです。その先生から、あるエピソードを教えてくださいました。

その朝、いつものように教室で子どもたちを迎えていると、いつも自分からあいさつをしてくる男子の「おはようございます。」の音が聞こえませんでした。担任から「おはよう。」とあいさつをすると、ぎこちない笑顔で「おはようございます」と、小さな声であいさつが返ってきました。何だか様子がおかしいなと気にかかりましたが、他の子とあいさつをしているうちに、そのことは忘れてしまっていました。

業間休みのことです。外で子どもたちと学級遊びをしていると、朝の男子の姿が無いことに気がつきました。教室に行ってみると、その男子は一人で読書をしていました。担任は、朝の様子を思い出し、話を聞いてみました。すると、朝、兄弟げんかをしてお母さんに叱られたことや、いらいらして外に出る気になれなかったことなど、いろいろと話をしてくれました。

子どもたちが普段の様子と違っていたり、トラブルを起こしたりする時には、事前に必ず何らかのサインを発しています。小さな変化を見逃さないことが、子どもの状況を知る第一歩になると改めて感じるエピソードでした。

学級担任のまなざし 16

Okayama Prefectural Education Center

R2.6.29(Mon)

「チューリップ」

ある就学前教育の研修会で、こんな話をされた先生がいました。

♪ さいた さいた チューリップの花が
ならんだ ならんだ 赤 白 黄色
どの花 見ても きれいだな ♪

よく知っている歌ですね。春、色とりどりのチューリップが花壇に咲いています。

「さいた さいた」という歌詞からは、花が咲いたことへの喜びが伝わってきます。チューリップは、秋も深まった頃に、球根を植えます。球根は、厳しい寒さの中、暗く冷たい土の中で暮らすこととなります。でも、ただじっとしているわけではありません。冷たい土の中で小さな体の中に力を蓄え、春に見事な花を咲かせるための地道な準備をしているのです。

チューリップの歌は、「努力の大切さ」を教えてくれています。

「どの花 見ても きれいだな」という歌詞にもあるように、チューリップは、赤、白、黄色、紫、ピンク、オレンジなど、本当にいろいろです。花の色は違っていても、どの花もみんなきれいです。色は違っていいし、違うからいいということですね。チューリップの歌は、「個性の大切さ」も教えてくれています。

鉄棒で逆上がりを一生懸命練習している子どもが、なかなか上手くできず投げやりになっているとき、その子にしっかり寄り添い、励ます先生がいます。一人一人の興味や関心を大切に、環境づくりをしている先生もいます。そして、心から「どの花 見ても きれいだな」と思える感性を持っている先生もたくさんいます。

学級担任のまなざし 17

Okayama Prefectural Education Center

R2.6.30(Tue)

「鏡の前ですること」

ある日、安全点検のため、先輩教員と校舎内を巡視していた時に尋ねました。「この学校には、なぜいろいろな所に大きな鏡があるのですか？」

その学校には、階段の踊り場や廊下などに大きな鏡が設置してありました。「どうしてだと思う？」と問われ、「子どもが服装を整えるためですか？シャツのえりやすそ、名札を確認したり。」「そうですね。身なりを整えさせることは大切ですから。他にはどうですか？」「安全のためですか？」と答えると、「曲がり角や出入り口は見通しが悪くて衝突が起こりやすいから、鏡を取り付けているんですよ。」と、教えてくれました。

そして、「自分は朝、教室に向かうとき、踊り場にある鏡の前で、笑顔を確認してから、教室に入っています。そして、子どもたちの前に笑顔で立つことを大事にしています。笑顔の方が子どもたちも気持ちいいですよ。」と話を続けられました。

その話を聞いて、私はドキッとしました。教員も人間ですから、体調が悪かったり、家庭や通勤途中でいやなことがあると、不機嫌な気持ちのまま出勤してしまうこともあります。でも、それは教員の都合であって、子どもには関係のないことです。

それ以来、私も毎朝、子どもたちが今日も一日がんばるぞ!という気持ちになれるように、笑顔で子どもたちの前に立つようにしています。教室に向かう鏡の前で、笑顔を確認するのが私の日課になりました。そして、子どもたちに向けた笑顔は、自分自身の気持ちも前向きしてくれています。笑顔の輪が広がっていくといいなと思っています。

学級担任のまなざし 18

Okayama Prefectural Education Center

R2.7. 1[Wed]

「先輩の教室の窓を開けてみよう」

教員生活にも少しずつ慣れてきたある教員が、学年主任と話をしています。「隣の1組の先生には、とってもお世話になっています。」「よかったね。出会って大切だよね。」「でも、私は先生のお役に立てることがなかなかなくて…。」「それなら朝、自分の教室に行った時に、1組の教室の窓も開けてあげるといいよ。」「それなら私にもできそうです。」

次の日から、自分の教室の窓を開けるついでに1組の教室の窓を開けることにしました。最初は、ただ窓を開けるだけでしたが、しばらく続けるうちに、教室の中のいろいろなことに気が付くようになりました。

例えば、教師机の上はきれいに整頓されて、作業や丸つけなどが広いスペースでできるようになっています。黒板には、ときに子どもたちを認め、ほめる温かいメッセージが書かれています。そして、朝の活動ですることの準備と指示ができています。また、掲示されている図工の作品は、構図や彩色などの指導が行き届いています。同じものを描いているはずなのに、自分の教室の作品とはずいぶん違います。

「放課後に絵の指導についてもう一度尋ねてみよう。」そう思ったとき、窓を開けるようにとアドバイスをしてくれた理由が分かりました。

それ以来、学校の中にもたくさん学ぶチャンスがあることに気付いたその教員は、周りの教員のよいところを見つけては真似をしてみるようにしています。時には自分には合わないなと思うこともあります。いろいろな試してみることに楽しさを感じるようになっていきます。

学級担任のまなざし 19

Okayama Prefectural Education Center

R2.7. 2[Thu]

「二つの笑い」

学校訪問の際、ある教室に「笑顔いっぱいの学級にしよう」という掲示がなされているのを見かけました。学級のめあてのようでした。みんなが笑顔で過ごせる学級になるといいなと思いました。

同時に、20年以上前に聞いた、元中学校教員のハツ塚実氏の講演を思い出しました。氏は、笑いに関して次のような内容の話がされました。

「笑いが野放しなのです。笑いが野放しだと、どうしても傷つく子が出る。仲間はずれが出る。今の世の中は笑いに無関心で鈍感すぎる。だから、僕は『ドッ』と笑う、人をさげすむ笑いをできるだけなくしていく努力を地道にやります。そして、『アッ』という驚き、本当の意味での喜びを集めようと中学生に話します。笑いには、絶対にしてはいけないものがあることを強く押さえます。」

先ほどの教室の背面には、「笑顔の木」と題した模造紙が掲示され、木の葉を模したカードがたくさん貼られていました。「休み時間に、いっしょに遊ぼうとさそってもらったとき、うれしかったです」というカードもあれば、「いっしょに練習していた友達が、なわとびで二重とびが20回できたとき、笑顔になりました」「教室のメダカが卵を産んだとき、感動して、笑顔になりました」というカードもありました。

笑いが人の心を温かくすることがあります。誰かが困難を乗り越えたとき、友達と協力して成し遂げたとき、素敵なものに出会えたとき、心と心が通い合ったときなどの笑いは、感動の笑いです。子どもたちと一緒に、「アッ」という感動の笑いが満ちあふれる教室が増えることを願っています。

学級担任のまなざし 20

Okayama Prefectural Education Center

R2.7. 3(Fri)

「整理整頓」

ある学級の1時間目の授業は、毎日国語で、漢字ドリルで始まります。1時間目のチャイムが鳴り始めると同時に、読書タイムに読んでいた本を机の中に片付け、チャイムが鳴り終わるまでには、すでに1文字目の練習を開始している子どもがいます。多くの子は、その30秒後ぐらいから開始し、数人は3分ぐらいたってから漢字ドリルを開き始めます。

この違いはなぜなんだろうと思い、何日か観察していると、ようやくその違いの原因が分かりました。「机の中の教科書やノートが一番上に、漢字ドリルを置いている」ことでした。なんだそんなことか、と思いましたが、取りかかりの早い子どもはみんなそうでした。先を見越した整理整頓ができていたのです。

教室には、片付けや整理整頓が苦手な子どももいます。その担任も「ちゃんと片付けなさい。」と叱っていましたがうまくいかず、先輩教員に相談し、毎日の帰りの会の最後に、1分間の「片付けタイム」を行うことにしました。机の中のものを一旦、全部机の上に出し、ゴミをその場で捨て、家に持ち帰るものをすぐにランドセルにしまえます。きちんとそろえ、机の中に戻します。

一人ではうまくできない子は友達が手伝ってくれます。「あまり使わない色鉛筆は奥に入れるといいよ」と教えてくれます。もちろん、担任が手伝うこともあります。苦手な子どもにとっては、手伝ってくれている様子を見ることも大切な勉強です。片付け方やコツを真似るチャンスになります。3か月ぐらい続けていると、「片付けタイム」は1分間もかからなくなり、「机の中は大丈夫ですか?」と声をかけるだけで済むようになります。

「ちゃんと片付けなさい。」と叱るだけでは、何をどうすればよいのか分からない子どもがいます。学ぶ場を作り、その場でやらせ、一緒にやり、続けていくことが大切です。

学級担任のまなざし 21

Okayama Prefectural Education Center

R2.7. 6[Mon]

「地元は教材の宝箱」

放課後、ある教員が職員室で学級事務などをしていた時のことです。先輩教員が教頭先生と何か話をした後、「ちょっと出てきます。」と言って、校外に出かけていきました。

そんなことが何度かあったので、ある時「いつもどこに出かけているのですか？」と尋ねてみました。すると先輩から、「教材研究だよ。」という答えが返ってきました。その教員は不思議に感じました。教材研究といえば、「職員室で、教科書と指導書ですもの」と考えていたからです。先輩は続けてこう言いました。「地元は教材の宝箱だからね。」…より一層、分からなくなりました。

何日かたったある日、その先輩から「教材研究に行くけど、ついてくる？」と誘われました。「はいっ」と答え、教頭先生に一言告げて、先輩について行きました。道すがら、先輩は会う人会う人と言葉を交わしています。目的地の小さな商店に着くと、店の主人にいろいろな質問をしました。最後に先輩が「いいお話をありがとうございました。この店にかけるご主人の思いは、必ず子どもたちの心に響くと思います。授業の後、子どもたちが何人か質問に来ると思いますが、その時はよろしく願います。」と伝えていました。

先輩は3年生の社会科で、商店の仕事の授業を行うにあたり、子どもたちの住む地元で実際に商売している人から、働く人の苦労や工夫、思いや願いを直接学ばせたいと考えたのです。まだ、総合的な学習の時間がなかった頃の話です。

地元には商店を営む人以外にも様々な職人さんや農家、漁師さん、郷土の歴史に詳しい方など、その道のプロの方がたくさんおられます。そんな方々からの学びは、子ども達たちの心を大きく育ててくれます。

学級担任のまなざし 22

Okayama Prefectural Education Center

R2.7.7(Tue)

「間違えるところ」

初任の頃の出来事です。算数の時間でした。「 $2 \times 6 =$ 」という問題に、ある子が「8です」と答えました。その瞬間、教室に「えー!」「ちがいまーす!」という言葉が飛び交いました。「12なのに!」「そんな簡単な問題もできないの?」というささやきもありました。「8です」と答えた子は下を向いたまま、顔を上げませんでした。私は「そんなことを言っではいけません」と言うのが精一杯でした。

子どもたちは、間違いや失敗をしながら成長していくものですが、教室の中で実践するのは難しいことです。子どもは、間違いや失敗を怖がります。教室の雰囲気そうさせているのかもしれませんが、「えー!?!」「ちがいまーす!」という言葉を見ると、「間違えたら笑われる」「間違えたら恥ずかしい」という気持ちになり、「もう二度と、発表しない」となるのかもしれませんが。残念なことです。せっかく、がんばろうと思っけていても、教室の雰囲気に押しつぶされてしまうのです。

放課後、学年主任にその日の出来事を話しました。主任から「どうすれば良かったと思う?」と尋ねられ、「そうですねえ」と悩みながらも、あれこれ話をしました。

学年主任は、「例えば、どのように考えて8という答えを求めたか、みんなで考えるのはどうでしょう。きっと『 $2+6$ をしたんじゃない?』という意見が出て、『計算は、記号をよく見ないといけないね』と担任がまとめれば、『間違いのおかげで気をつけるポイントがみんなよく分かったね』となるんじゃないかな」と言われました。

その後、「教室は間違えるところだ」という蒔田晋治さんの詩を紹介してもらいました。とても気に入ったので、自分の教室の壁に掲示しておきました。

学級担任のまなざし 23

Okayama Prefectural Education Center

R2.7. 8(Wed)

「保護者懇談会」

若手教員の中には保護者懇談会に苦手意識を持っている人もいます。私もそうでした。

「子どもが通知表を持って帰った時、何と言葉をかけるか」という話題で懇談会をしていた時のことです。あるお母さんが「私は『花子ちゃんは、どんなことを頑張ったの？ … それをよく頑張ったのね。じゃあ、今度は何を頑張りたい？ … 今度はそれを頑張っただけ』と言うかなあ。まずは、頑張ったことを聞いてあげたい」と言います。隣の保護者が「なるほど。そう言われると、子どもも笑顔で頑張ったことが話せるし、やる気もわいてきますね。」と続きます。別の保護者が「私は『太郎くんは、今度は何を頑張りたい？ … じゃあ、今度はそれを頑張っただけ』と、頑張らないといけないうことから聞いてしまうかも」と言うと、「そう聞かれると、頑張ったことが言いにくくなってしまうわね。」という発言が続きます。

「先生は、どう思いますか？」と尋ねられ、「まず、頑張ったことを聞く方がいいと思います。もし、『次郎くん、今度は何を頑張らないといけないうの？ … えっ、それだけ？ もっとあるでしょ。お姉ちゃんはもっと頑張っていたわよ。どうしてお姉ちゃんのように頑張らないの？ ところで、次郎くんは何を頑張ったの？』と言われたら、通知表なんて見せなきゃよかったと思うに違いありませんね。」懇談会は、大爆笑となりました。

前日まで子育てや心理学の本を読んで「懇談会で何かいいことを言わなくっちゃ」とプレッシャーを感じたまま当日を迎えたのですが、終了後、ある役員の「先生、みなさんの意見、勉強になりましたね。」という言葉聞き、「保護者に何か教えないと、と気負わずに、逆に子育ての経験者である保護者から勉強するつもりで参加しよう」と考え直すと、次の保護者懇談会が楽しみにになりました。

学級担任のまなざし 24

Okayama Prefectural Education Center

R2.7.9[Thu]

「正直に生きる」

体育の時間のことです。運動場で、サッカーをしていました。ある子どもが相手チームのパスをカットして、そのまま相手ゴールを目指します。猛スピードでドリブルをして、走り抜けていきます。そのボールを奪い返そうと、相手チームの子どもたちも必死に追いかけていきます。とてもスピード感のある状況です。ドリブルをしている子どもは、どんどんサイドにあるタッチラインに向かって走って行き、とうとうタッチライン直前まで進んでいきました。

その時、ドリブルをしていた子どもが急に止まり、ボールを拾い上げ、相手チームの子どもにポンと渡しました。ホイッスルは吹かれていません。「あれっ？ どうしたのだろう？」と不思議な気持ちになりました。しばらく見ていると、相手チームのスローインとなりました。そのまま、試合は続いていきます。

相手チームの子どもに「ライン、越えた？」と聞かれたその子どもは、「うん！」と悔しそうな顔をしながらも、何事もなかったかのような表情を見せていました。

いい光景でした。広い運動場なので、審判をしていても、全てを見ていることはできません。相手チームの子どもたちから「ラインを越えた」というアピールの声が上がったわけでもありません。その子どもは、ドリブルをしながらタッチラインを割ったと判断し、申告したのです。「正直だ」と思いました。同時に、「お天道様が見ている」という昔の人の言葉を思い出し、一人の人間として、感激しました。

ただ、一つ後悔があります。その時、その子どものすばらしい行為を取り上げて、しっかりほめることができなかったのです。あまりの正直さに感動し、ほめるチャンスを失ってしまったのでした。

学級担任のまなざし 25

Okayama Prefectural Education Center

R2.7.10(Fri)

「思いやりの心」

図工の時間に使う牛乳パックを持ってくるように、子どもたちに連絡していました。

その日、子どもたちは「おはようございます!」のあいさつとともに、手に牛乳パックを持って教室に入ってきました。ふと、ある子どもを見ると、両手に牛乳パックを持っている姿が目に見え飛んできました。「二つ持ってきたの?」と言うと、その子は「お母さんが『忘れた人にあげてね』って言ったから、持ってきたの。」と答えました。お母さんのやさしさが伝わっているようで、その子にはにこにこ微笑んでいます。また、私もお母さんの思いやりの心が伝わる話を聞いて、うれしくなりました。

後日、そのお母さんと話をする機会があり、牛乳パックの件のお礼を言うときこんな話をされました。

「自分がまだ子どもだった頃、私の母親は、学校で用意するように言われたものを私に持たせるとき、いつも少し多めに持たせてくれました。算数の時に使う空き箱、図工の時に使う輪ゴムや割りばしなど、元々家にあるものを持って行くときは、少し余分に持たせてくれたのです。」「それは何のためにですか。」「と尋ねると、「母は、うっかり忘れた子どもや忙しくて用意できない家庭もあるだろうから、とよく言っていました。」

素敵なお話だなあと思いました。温かい気持ちになりました。なるほど、だからそのお母さんも、自分の子どもに同じようにしているのだと気が付きました。

思いやりの心を育てるといえるのは、こうした小さなところから行われるのだなあと感じました。私も、学級担任として、小さな出来事を大切にしながら、思いやりの心を持った子どもたちを育てていきたいと思いました。

学級担任のまなざし 26

Okayama Prefectural Education Center

R2.7.13(Mon)

「友達の言葉」

ある教室での出来事です。担任が不在だったので、代わりに指導に入っていました。帰りの会で、日直の子どもが「今日めあてが守れた人は手を挙げてください。」と言いました。何人かの子どもが手を挙げました。次に、日直の子どもが「今日めあてが守れなかった人は手を挙げてください。」と言いました。また何人かの子どもが手を挙げました。(守れなかった人に、どう言うのかなあ)と思って見ていると、急に、日直の子どもが「今、どちらにも手を挙げなかった人がいます。もう一度聞きます。必ずどちらかに手を挙げてください。」と言って、聞き直しました。あまりの毅然とした態度に驚きました。同時に、「なかなか、すごいな。」と思いました。

「めあてが守れた人は手を挙げてください」と言われているのに、手を挙げないままで済ませてしまうと、「日直の友達の言葉は、聞き流しておいてもいい」ということになってしまいます。「めあてが守れなかった人は手を挙げてください」と言われているのに、手を挙げないままで済ませてしまうと、日直の友達の言葉は、ただ聞こえているだけの無意味な音になってしまいます。そもそも日直の友達の言葉を聞こうとしていなかったり、聞いていても知らん顔をしていたりするのは、大きな問題です。

授業中の友達の発言や朝の挨拶の号令、給食開始時の「手を合わせましょう」の挨拶などの場面で、友達の話をきちんと聞こうとするところや、友達の言葉をしっかり受け止めるところから、友達同士のつながりが生まれ、人間関係ができ、友情が育まれるのだと思います。この教室の担任は、普段の生活の中のほんの小さなことから、友達の言葉を大切にしている指導を行っている様子うかがえる出来事でした。

学級担任のまなざし 27

Okayama Prefectural Education Center

R2.7.14(Tue)

「力を借りたら」

ある学校で、車いすを使って生活している人が子どもたちに体験談を語りました。

「私は、足がみなさんのようには自由に動かないので、車いすを使って生活をしています。足が自由に動かなくても、いろんな方法で移動できるようになれば、不自由や不便さも少なくなります。駅にエレベーターがあったり、ちょっと困ったときに助けてくれる人がいたりすれば、楽しく暮らすことができます。」

次に、その人が子どもたちに「『友達のを借りたら』の続きには、どんな言葉が入りますか。」と問いました。しばらく考えた後、ある子どもが「『ありがとう』って言う!」と答えました。「親切にしてもらったらお礼を言いましょうと教わっているのですね。大切なことですね。」他に「返す!」という発言もありました。「そうですね。借りたものはきちんと返しませうとお家の人に言われているのでしょうか。友達の力も借りたら返さなくてはという気持ちはよく分かります。でも、友達の力は借りたから返してあげるといのはちょっと違う気がしますよね。」

別の子どもが「一人ではできないことができる!」と言いました。「おおー!」という声が上がりました。「そうですね。みなさんも、どんどん友達の力を借りて、どんどん友達に力を貸すと、今よりもっともっと大きく成長できるのではないのでしょうか。この学校には、きちんと感謝を伝えることができる人や友達と協力できる前向きな心を持った人がいて、とてもうれしくなりました。」という言葉をいただきました。

助けてもらったから助けてあげるのではなく、思いやりの気持ちで力を貸してあげられる子どもに育てて欲しいと思いました。

学級担任のまなざし 28

Okayama Prefectural Education Center

R2.7.15(Wed)

「教員の言葉」

運動場の方から、担任しているひろしくんの大きな声が聞こえてきます。休み時間に教室にいた私は、「どうしたのかな？」と思いつつ、玄関に向かいます。すると、ひろしくんが「あきらくんとは、もう、絶対に一緒に遊ばない!!」と言いながら、靴箱のところで上履きに履き替えています。

養護教諭も駆けつけ、「ひろしくん、一緒に保健室に行こうか。」と言って、ひろしくんを連れて行きました。私もついて行きました。

「ぼくが、ジャングルジムで遊んでいたら、あきらくんが来て…。」と、ひろしくんはその時の出来事を話します。とても腹立たしかったので、以前にされて嫌だったことも話し始めました。ひとしきり、心の中にあった嫌な思いを話し終えました。

その養護教諭は、ひろしくんの気持ちを受け止めながら、しばらくやりとりをした後、こう言いました。「じゃあ、今度は、今まであきらくんにやさしくしてもらったときのことを話してみてる？」少しの沈黙の後、「この前、僕が運動場で転んで血が出たとき、一緒に保健室についてきてくれた。」「それから、ドッジボールに入れてくれた。」「それから、…。」と、次々に思い出した出来事を話し続けました。やがて、心なしか表情も和らぎ、声のトーンも落ち着いてきました。再び、少しやりとりした後、「さあ、もう一度、ジャングルジムに行ってきたら。」と言われて、ひろしくんは「うん!」とうなずきました。

子どもたちは、いろいろなトラブルに出会いながら大きく成長していくのだとつくづく思いました。そうしたトラブルを子ども自身が上手く乗り越える経験はとても大切で、そんなとき、教員としてどんな言葉で語りかけることが必要なのか考えさせられました。

学級担任のまなざし 29

Okayama Prefectural Education Center

R2.7.16[Thu]

「靴の表情」

初任の私は、職員朝礼を終え、急いで職員室を出て、一直線に教室へ向かいます。「今日も、がんばるぞ!」と前向きな気持ちで歩きます。途中で「今日の笑顔は?」と階段の踊り場にある鏡に向かってにっこり笑い、笑顔をチェックします。

ある日、学年主任が2階の教室に向かうとき、回り道をしていることに気がきました。(急いでいるはずなのに)と不思議に思い、放課後、尋ねてみました。すると、学年主任はこう言いました。「教室に向かう前に、子どもたちの靴箱を見に行っているんですよ。」「靴箱をですか? きちんと靴が入っているか、チェックしているのですか?」と聞くと、「う〜ん、チェックというより、靴の表情を見に行っているという感じかな。」と言いました。「靴の表情?」ますます不思議な気持ちになりました。

学年主任は、学期の始めには、「靴を靴箱に入れるときは、かかとをそろえましょう」という呼びかけをするそうです。「場を整える」ことを指導するのは大切だと考えているからです。しかし、毎日当番が靴箱をチェックする活動まではしていないとのこと。毎朝靴箱のところに行き、担任としてみんなの靴をざっと眺めるというのです。「光くんの靴は、落ち着いているわね」とか「花子さんの靴、今日も元気いっぱいね」、「太郎くんの靴、何かあったのかな。元気ないわね」、「おやおや、次郎くんの靴、ひっくり返っているわ」など、靴の表情を見て子どもの顔を思い浮かべ、今日どう接するか考えながら教室に向かうのだそうです。「靴で子どもの気持ちが分かるのですか?」と聞くと、「気持ちまでは分からないけど、感じるくらいかな。」と微笑みました。

子どもたちの気持ちが落ち着き、学級の雰囲気よくなると、自然と靴箱の靴も整うのだそうです。靴の表情は分からなくても、明日から真似をしてみようと思いました。

「行事で育てる」

幼小連携の取組として、学区にある幼稚園の生活発表会を参観した時のことです。

劇の中で、オオカミ役の子どもがセリフを詰まらせてしまいました。何度か言い直しを試みましたが、とうとう止まってしまいました。沈黙の後、「どうなるのだろう…」と思った瞬間、こぶた役の子どものが、こそこそっとオオカミ役の子どもに耳打ちをしました。オオカミ役の子どもは小さくうなずき、大きく息を吸ってから「それなら、こうしてやろう!…」とセリフと演技をつなぎました。子どもたちみんながそれぞれの役を楽しんでいる姿と、子ども同士によるさり気ないアシストのお陰で、劇は大成功でした。

数日後、園長先生と話をする機会があり、こんな話を聞かせていただきました。「上手に歌えることやセリフをすらすら言えることより、子どもが友達と力を合わせて発表している姿を大切にしました。発表会は日常の遊びや生活の延長なので、当日の出来映えと同じくらい、毎日の練習が大切です。練習で、どうしてもカスネットのリズムが合わない子どもがいたのですが、友達がそばでずっと教えていました。リズムよく打てるようになるまで、何度も何度も付き合っていました。このような、日々の生活で大切にしていることが発表でも生きているのだと思います。」

子どもたちは一人一人得意なことも苦手なことも違います。声の大きさも違います。人前に出ることが苦手な子どももいます。それでも、みんな大切な友達です。子どもたちは日々の遊びの中で、担任のかかわりを通じて、助け合いや支え合いの気持ちが育っていたのだと感じました。

行事は練習や準備に時間や労力がかかり大変ですが、ねらいをきちんと持って行えば、日常では得られない大きな学びがあるのだと思いました。

学級担任のまなざし 31

Okayama Prefectural Education Center

R2.7.20(Mon)

「ピンチをチャンスに」

初任の頃の出来事です。自分のクラスは、落ち着きがなく、子ども同士のトラブルが毎日起こっていました。トラブルが起きる度に、「またかあ。」とため息ばかりついていました。そのことを先輩教員に相談すると、「学校はたくさんの子どもが集まるところ。トラブルは起きて当たり前。そのトラブルから子どもやクラスが学んで成長していくことが大切。自分は、『ピンチをチャンスに』と考えるようにしているよ。」とアドバイスを受けました。

次の日の昼休み、またトラブルが起きました。今度は、自分のクラスのこうじくんと先輩のクラスのしんじくんのトラブルです。腹が立ったこうじくんは、石を投げてしんじくんの足に当ててけがをさせてしまったのです。

しんじくんのけがの処置の後、先輩はそれぞれから事情を聞いていきます。「まずはこうじくん。何が一番腹が立ったのか、教えてくれる?」「だって、しんじくんが仲間に入れてくれないのがずっと続いてて。それで腹が立って石を投げた。」「そうか。仲間に入れてもらえなくて、腹が立ったから石を投げてしまったんだね。」「次はしんじくん。今の話は本当?」「うん。でも、こうじくんはいつもルールを破って、自分勝手なことばかりするからおもしろくないんだ。だから・・・。」先輩は2人の気持ちを聞き、それぞれの気持ちに共感しながらも、「だめなことはだめ」ときちんとして指導していきます。そして、今度からはどのようにすればけんかをしなくてすむかアドバイスをしました。私はその指導を横で見ている、そのあざやかさにびっくりしました。

『ピンチをチャンスに』それ以来この言葉は、私の大好きな言葉になりました。ピンチがあったときには、いつも思い出します。そして、子どもたち自身にこれからどうしたら良いか考えさせ、次につながる指導を心がけています。

「友達のジャガイモ」

ある小学校の一年生が「『同じ』と『違う』について考えよう」というテーマで、体験的な学習を行いました。

担任が一人に一個ずつジャガイモを配ります。子どもたちは「何が始まるんだろう」という表情です。担任がめあてを提示した後、「みなさん、目の前のジャガイモと友達になりましょう。なれますか?」と問います。「なれる!」「もう、なれた!」この辺りはさすが一年生。友達になるための方法は自分で考えることにします。「似顔絵」と称してジャガイモをスケッチしている子がいます。友達だから「名前」を付けている子もいます。「ざらざらする」と触ってみたり、「土のにおいがする」とにおいをかいてみたり、「ここ、けがをしている」と傷を見つけたりしています。ジャガイモと触れ合った後「なかよくなれましたか?」と尋ねると、「なれました!」という声。

「では、ジャガイモたちに集合してもらいます」と言って、ダンボールに全てのジャガイモを戻し、尋ねます。「みなさん、この中から、自分の友達のジャガイモをすぐに見つかりますか?」子どもたちは「見つけれられる!」と自信満々です。実際探してみると、あっという間に見つけていきます。「この色が…」「ここがへこんでいるから」「コロンくんだ」など、ロ々に特徴をつぶやいています。全員が無事見つけ、感じたことの発表や担任とのやりとりを行いました。振り返りでは「同じジャガイモでも、よく見たら全部違うことが分かった」「友達になるためには、よく見ないといけないと分かった」などの発言がありました。

参観していて「ジャガイモという点では同じ、でも、よく見れば全部違う。よく見るためには『思い込み』で見るのではなく『事実』を見ることが大切。一年生ではそうした結論や事実を教え込むより、発達段階を踏まえ、子ども自身が気づき、感じ、考えていく学習が大切だ」と学びました。

「ジャガイモの命」

ジャガイモを使って「『同じ』と『違う』」について考えた授業の後日談を聞きました。保護者から「持ち帰ったジャガイモは友達だから食べない、と言い張るので、何とか納得させてほしい。」という連絡があったそうです。

友達になったジャガイモを家に持ち帰った一年生に、ジャガイモのその後を尋ねると、「そのまま置いている。」「飾っている。」「畑に植えたので、ジャガイモがたくさんできるといいな。」という状況でした。また、「食べた。」という声もありました。「ええー！友達なのに、食べたの？」「食べてもいいのかなあ。」「食べずに置いておいたら腐るかも。」というつぶやきもありました。

担任は尋ねます。「給食には魚が出ますね。みなさん、魚を食べますね。元々生きていた魚を食べるということは命を取っちゃうことだから、悪いことですか？」子どもたちからは「仕方がないと思う。ぼくらが大きくなるためだから。」「魚を食べたら元気になって、骨も強くなるから食べる。」という意見が出ます。「私たち人間が大きくなったり元気になったりするためには、魚を食べないといけませんね。肉や野菜も同じです。魚や肉や野菜の命をもらって、私たちは大きくなったり元気になったりしているのですね。」と担任が言うと、「幼稚園で、魚の命は人間の体の中で生きていと勉強した。」という発言がありました。就学前に、しっかりと食育を行っていたようです。

「友達になったジャガイモは、もし食べても、みなさんの体の中で生き続けます。だから、ありがとうという気持ちで、食べてもいいんです。ジャガイモの命をもらって、みなさんの体は元気になっていくのです。」と話をすると、どの子どもも真剣な表情で担任の話聞いていたそうです。

その日、子どもたちはジャガイモの命のバトンを受け継いだことでしょう。

学級担任のまなざし 34

Okayama Prefectural Education Center

R2.7.27(Mon)

「子どもと遊ぶ」

同学年の先輩の先生は、昼休みになると子どもたちと運動場に出て、鬼ごっこやドッジボールにいつも夢中。様子を見てみると、どちらが子どもか先生か分からないくらい本気で遊んでいます。

「先生は、子どもたちと遊んでいるとき、失礼ですけど、まるで子どもみたいにすごく楽しそうですね。」と私が言うと、「そう見えますか。初任のあなたが来てくれたおかげで、私も初心を思い出してね。」と先輩。「そう言えば・・・」と話は続きます。

「私が先生になりたての頃、子どもが「遊ぼう。」と誘ってくれても、丸付けや授業準備でなかなか遊んであげる時間が取れないことがあったんです。それを当時の教頭先生に相談すると、教頭先生はしばらく考えた後に、「“遊んであげる”というより“子どもたちの遊びに入れてもらう”くらいの気持ちがいいかな。」と教えてくれたんですよ。

それを聞いて、当時の私は先生になれたうれしさでいつの間にか、自分が上から目線で子どもたちを見るようになっていたことに気づかされました。

それからは、授業中は先生として、休み時間は子どもと同じ目線で、思いっきり楽しんで遊ぶようになりました。すると、子どもたちとの絆も深まってますます仕事にやりがいを感じるようになってね・・・。もう20年以上前の話ですけど。」

その話を聞いて、先輩にも子どもたちとの関係づくりに悩んだことがあったんだと思うとともに、自分も20年後、子どもたちと思いっきり遊べる先生でありたいなと思いました。

「ものを大切にする」

音楽の時間に、鍵盤ハーモニカを使って学習していたときの話です。多くの子どもが新しい鍵盤ハーモニカを使っている中、お兄さんやお姉さん、近所の人から受け継いだものを使っている子どもがいました。その様子を見て、せっかくの機会なので、話をすることにしました。

「先生は、ものにはみんな命があると思っています。今、みなさんが使っている鍵盤ハーモニカにも命があると思います。それでは、その命が終わるのはいつでしょうか？」と尋ねます。しばらく考えた後、子どもたちからは「使えなくなったとき」「壊れたとき」「音が出なくなったとき」などの発言が出ます。「そうですね。もし、まだ使えるのに捨ててしまったとしたら、命を捨ててしまうことになりますね。」と言うと、子どもたちは大きくなずきます。「もしお家にお兄さんやお姉さんの、まだ使える鍵盤ハーモニカがあって、それをもらったとしたら、その人は鍵盤ハーモニカの命を受け継いだということになります。その人はものの命を大切にしたすばらしい人だと思いませんか？ みなさんも、いろいろなものの命を大切にしましょうね。」と言うと、「分かった!」「大事にする!」という元気な声が上がりました。

そして、もう一押しをします。「新しい鍵盤ハーモニカを使っている人は、新しい命をもらったという人です。大切に使って、もし弟や妹がいればあげられるように、いなくても近所の人に使ってもらえるように、新しい鍵盤ハーモニカの命を大切にしましょうね。」と言いました。「分かった!」また、元気のいい声が返ってきました。

いろいろな家庭があります。家庭環境も経済状況も家庭の考え方も様々です。子どもたちが前向きに学校生活を過ごすことができるように、心を配ることは大切だとつくづく感じました。

学級担任のまなざし 36

Okayama Prefectural Education Center

R2.7.29(Wed)

「強さとやさしさ」

高学年の野外活動の引率をしたときの出来事です。グループでの野外炊事となり、担任からの説明も終わり、いよいよ活動開始となりました。

あるグループは、一番に活動を始めました。食器を洗う子、野菜を切る子、かまどの火をおこす子、米を研ぐ子、それぞれが自分の仕事を次々と進めています。時には担任の説明通りには進まなかったり、ちょっとしたトラブルもありましたが、それぞれが自分の判断で活動していました。

他の多くのグループは、キョロキョロと隣のグループの様子を見ながら活動を進めていきます。隣のグループの活動を見て、自分が思っているやりかたと合っているかを確認し、自分の考えと同じだと安心して活動を続けます。

どちらのグループにも良さがありますが、「自分で考え、判断し、決断して行動する」には、勇気が必要だと感じました。

調理は進み、出来上がった時間はグループにより様々でした。早く終わったグループの子どもたちも、他のグループができあがるのを待っていました。本当は早く食べたかったのですが、「早くして!」などの言葉が出ることなく、ごく自然に待っていました。担任は「この学級の子どもたちは、心のやさしさはとても育っていると思います。でも、心の強さはまだまだ育てていかなければと思っています。」と話しました。

「一人でスタートを切る『強さ』と、最後の一人を迎え入れる『やさしさ』を持つ」

その学級の教室に掲示されていた言葉です。野外活動の様子から、普段の子どもたちの学校生活を垣間見た気がしました。

学級担任のまなざし 37

Okayama Prefectural Education Center

R2.7.30[Thu]

「次の人への心遣い」

雨の日に、学校訪問をすることがありました。校長室で学校の取組の説明を受けていました。

校長先生に「先ほど玄関を通ったとき、生徒の靴箱の靴が揃っているのを見ました。どのような指導をされているのですか。」と尋ねました。「教職員が共通理解して取り組んでいます。」の後、「まずは教えること、そしてやらせること、良くなった学級をほめること。」などを紹介されました。「やはり、ほめることが大切ですね。」と言うと「ほめられれば、やる気が出ますからね。」と言われました。

「でも、うちの学校には、もっとすごいことがあるんですよ、気がつきましたか？」と逆に尋ねられました。「えっ？ 何ですか？」すぐには思い浮かばず困っていると、こう言われました。「傘立てです。学級ごとに傘立てがあるのですが、傘がビシッと立っています。ぜひ、見てください。」そう言われ、実際に見に行くと確かに整然と立っています。無造作に突っ込まれ、半分開いたような傘は一本も見あたりません。「本当にそうですね、ビシッと立っていますね。」と言うと、「そうですね。靴箱と傘立ては違いますから。」と言われました。

校長先生によると、靴箱は個人スペース、傘立ては共用スペースだと教えるのだそうです。どちらも大切ですが、傘立ての指導で、マナーやルールを他の人への「心遣い」として教え、その意味を生徒が理解すれば、細かく言わなくても、生徒はきちんと応えて、水切りもするし、ネームバンドでしっかり留めるようになることでした。傘立ての使い方は、次に使う人への思いやりの心にかかわることなのだと気付きました。

外は雨でしたが、傘立ての姿から生徒たちの心遣いが伝わってきて、気持ちは晴れやかになりました。

「授業で学級経営」

先日、ある先生の授業を参観しました。学級の子ども一人ひとりの個性を捉え、上意下達でなく、ファシリテーター役に徹しながら、意図的に発言の少ない子どもや遅れがちな子どもを巻き込みながら、全員参加の授業をされていました。授業後にその先生を笑顔の子どもたちが取り囲んでいる様子はまさに、「授業で学級経営をする」姿に見えました。

「授業で学級経営をなささい」

私がまだ若手の教員だった頃に、校長先生からよくうかがった言葉です。

「授業は勉強を教える時間なのに、どうして学級経営をしないといけないのだろうか。」とあった当時の私は、「授業」と「学級経営」は別物と考え、授業では内容を進めることだけに一生懸命でした。そして、子ども一人ひとりが主役であるはずの授業なのに、時間不足を理由に、よく発言する子どもだけに目を向けて授業を進めてしまっていました。みんなに達成感や満足感が得られない授業の繰り返しでは、学級も授業も上手くいくはずがないことに、なかなか気付くことができませんでした。

どの学級にも、よく発言できる子どももいれば、本当は発言したい気持ちがあるのに、できにくい子どももいます。また、理解が進みやすい子どももいれば、そうでない子どもも必ずいます。いろいろな個性で学級は作られています。限られた時間の中でも、子どもたちを主役にしながら、みんなが「よく分かった」「できるようになった」と言える授業を目指したいものです。子どもを多面的に理解している学級担任だからこそ、一人ひとりを生かしながらよい授業をつくることのできるのです。

「時間を守ること～背中教える～」

学校生活は時程が決まっています、チャイムで行動します。月ごとの生活目標に「時間を守りましょう。」「チャイムの合図でスタートしましょう。」などと掲げる学校も多いと思います。

学校全体で同じ目標に取り組んでいても、自分のクラスと隣の先輩教員のクラスでは、時間に対する子どもたちの動き方が違うと感じた若手の先生。先輩のクラスの子ども達は、授業の始まりに遅れる子は一人もおらず、いつもチャイムと同時に授業がスタートできているのです。そこで、先輩の言動に注目してみると、あることに気づきました。

先輩は授業開始の1分前には必ず教卓の前に立っています。その姿を見習うように、子ども達も当たり前のように席に座って待つことができている。さらに、机の上には教科書やノート、ドリルなどの学習準備が全員できています。

行事や全校朝礼など学校全体が動く場面でも、必ず子ども達より早く集合場所に立って待っている先輩の姿があります。そして、先輩のクラスの子どもは、いつも一番に集合できています。普段から教室でしていることが、学校全体の場でも当たり前に行っているのです。

後から先輩に尋ねると、「自ら手本を示すことを大切にしているんだよ。学習準備は、前の授業の終わりに一声かけて確認しているよ。」と教えてくれました。

先輩は、始まりだけでなく終わりのチャイムも必ず守るそうです。「終わりのチャイムが鳴ると、子どもの集中はそこで切れるもの。時間を延ばして切りのいいところまで・・・と思うけど、子どもはそうじゃない。始まりを守らせるなら、終わりも守らないとね。」と笑って教えてくれました。

学級担任のまなざし 40

Okayama Prefectural Education Center

R2.8.4(Tue)

「回復する力」

ある小学校で持久走大会が行われました。

大会の2か月前から練習が始まりますが、先輩の体育主任が全校児童に向け、話をされました。「持久走大会では、全員が1位になることはできない。しかし、全員が全力で走ることならできる。全員が自己最高記録を出すことならできる。」短い言葉でしたが、子どもたちの真剣な表情からは体育主任の思いが伝わっていたことが分かりました。

大会当日、山道で安全確認の担当をしながら、走ってくる子どもたちを見ていました。「もうだめだ…」「歩こうか…」「止まって休もうか…」 そう思っていた子どももいたかもしれません。特に、集団の後ろの方を走る子どもたちからは、そんな声が聞こえてきそうでした。でも、目の前を通り過ぎるとき、子どもたちからは「でも、もう少し…」という声も聞こえてきそうでした。みんな、自分の心の中の自分と戦っていたのでしょう。背中を見送るとき、「自分に負けるな」という気持ちを送りました。

持久走の練習や大会を通じて、子どもたちは多くのことを学びました。勝ち負けだけではありません。中には、いつも通りの力が出し切れなくて悔しい思いをした子どももいましたが、その悔しさをどう次に生かすかを学べば、大切な学習となります。いつも上手いくことばかりではありません。失敗したとき、思うような結果が出なかったとき、自分の心の弱さに負けてしまったとき…、そこからいかに回復していくかが大切で、そうした回復力を育てる教育を進めていきたいと思いました。

持久走に苦手意識を持っていた子どもが、その日の日記にこう書いてありました。「ゴールした瞬間、『自分に勝った!』と思った。」

学級担任のまなざし 41

Okayama Prefectural Education Center

R2.8. 5[Wed]

「子どもをよく見ると」

社会科の学習で「都道府県カルタ」を子どもたちと作りました。帰りの会で「都道府県カルタをします。」と言うと「やったあ!」と歓声が上がります。

しかし、試合が始まると、教室は騒がしくなり、トラブルが起こります。「太郎くんがうるさくて、読み札の声がよく聞こえなかった。」というクレームが出ます。「ぼくが先に取った!」「いや、私の方が早かった!」という言い争いをするペアもあります。勝ちにこだわりすぎて自分の都合のいいように文句を言う子どももいます。自分が思うように札を取れないのでムツとしたり、ふてたりする子どももいます。

ある日、学年主任に相談しました。主任の学級でも同じように「都道府県カルタ」をしていましたが、「楽しくやっていて、特に困ったことはないけど…」とのことでした。学級の様子を伝えると、主任に言われました。「何のためにカルタをするのかを子どもたちに伝えないといけないわね。社会の学習の発展でもあるけど、ルールやマナーを守る大切さを学ぶということも伝えないとね。それから、ちゃんとしている子どもを取り上げてほめることも忘れないでね。」

翌日、試合前にルールとマナーを確認し、試合中は子どもの様子を見取り、試合後に取り上げてほめました。騒然としていた時は見えていなかった子どもの姿が見えました。札を取った後も静かに待っている子ども、同時に同じ札を取ったとき黙ったままジャンケンをしているペア、試合が終わると「ふー」というため息をつくほど集中している子ども、負けても悔しさをぐっとこらえて「次は勝つから」と微笑んでいる子ども…。どんな状況の中でも、がんばっている子どもがいるのだと改めて知りました。

学級担任のまなざし 42

Okayama Prefectural Education Center

R2.8.6(Thu)

「助ける」

低学年の体育の授業を参観していたときの事です。

こおり鬼をしていました。まず、鬼を4人決め、鬼にタッチされると馬跳びの馬の状態でおおってしまいますが、タッチされていない友達に跳び越えてもらおうと復活できるという鬼ごっこです。準備運動の後、3分間、この単純な鬼ごっこを子どもたちは楽しそうにやっていました。

その間担任は、子どもたちの様子をじっと見えています。いろいろな子どもがいます。タッチされないように、体育館の隅っこにじっとしている子どもがいます。鬼の4人を目で追いながら息を潜めているみたいです。また、ずっと「キャー!」と叫びながら逃げ回っている子どももいます。大声で叫んでいるので、すぐに鬼に見つかりタッチされますが、大声で「助けてー!」と叫ぶので、すぐに助けてもらっています。他に、自分がタッチされることを顧みず、ひたすらおおっている友達を助けようとしている子どももいます。跳び越えようとするとスピードが落ちるので鬼にタッチされますが、復活後も果敢に助けようとしています。

1回戦が終わり、担任の周りに子どもたちが集まり、担任は尋ねます。「最後に残っていた人?」大勢が手を挙げ、みんなで拍手をします。「一度もおおらなかった人?」数人が手を挙げ、拍手をします。更に尋ねます。「友達を何人助けて復活させましたか? 1人の人? 2人の人?…」最高は5人を助けた子どもでした。大きな拍手が起こりました。

たかが鬼ごっこですが、夢中になって仲間を助けようと走り回っていた姿が印象的でした。そして、その姿を取り上げ、しっかりほめた担任もすばらしい学級経営をしていると感じました。

学級担任のまなざし 43

Okayama Prefectural Education Center

R2.8.7(Fri)

「初めて学級担任をしているみなさんへ」

放課後、子どもたちが帰った教室に一人残って、一日の出来事を思い出すのが日課でした。「今日は子どもたち全員と話ができた」…そう自信を持って言える日もありました。しかし、「今日、あの子と話をしていない…」と無力感に包まれる日もありました。毎日、教室という空間で、担任と子どもたちが生きていくことは、そんなに簡単ではありません。泣いたり怒ったり、悲しんだり悩んだりすることもあります。そんな時、今より少しでも子どもたちの心を知ることができたなら、子どもたちともう少し違った一日を過ごすことができたのではないか、今より少しでも力のある担任であったなら、もう少し違った寄り添い方ができたのではないか、そんなことを考える日もありました。

今年、初めて学級担任をしているみなさんも、一学期の間、夢中で頑張ってきたことと思います。新型コロナウイルス感染拡大により、学級づくりや授業づくりも難しく、休校や学校行事の縮小、毎日の健康観察や消毒など対応も大変で、緊張の日々だったことと思います。そうした中でも「子どもたちのために」という気持ちを胸に、ひたむきに頑張ったことでしょう。今から思えば「あの時、ああしておけばよかった」と思うことはあると思います。でも、あの時には、あの時の全力を出していたのではないのでしょうか。あの時には、やっぱりあれ以上のことはできなかったのではないのでしょうか。それでいいのだと思います。

全てを自分でやり遂げる人がすばらしい学級担任ではありません。すばらしい学級担任とは、全力を尽くしながらも自分の限界を知って、謙虚に学び続ける人です。一学期を走り続けたみなさん、ここで一度立ち止まり、ゆっくり心と体を休めてください。そして、自分のために素敵な時間を過ごしてください。みなさんにとって有意義な休暇となるよう願っています。

学級担任のまなざし 44

Okayama Prefectural Education Center

R2.8.25(Tue)

「初心に戻る」

夏季休業中のある日、初任者から相談を受けました。「4月から学級経営に力を入れて、それなりに上手くいっていたのですが、6月頃から何となく学級がザワザワして、そのまま一学期が終わったんです…。」と言うのです。よい機会なので、一緒に考えることにしました。

人間、誰にでも好調の時もあれば不調の時もあり、それは教員にも子どもにも当てはまります。体や気持ちの調子にも波があるもので、どの学級にも波はあるものだ、と最初から思っていた方がいいと思います。4月は、子どもたちみんな新しい気持ちで張り切っていて、授業中の態度や学級の仕事への姿勢、宿題への意欲や友達関係も好調です。そして、5月、6月。連休もあり、梅雨で湿気も多くなり、暑くなり、担任や学級の友達にも慣れ、少しずつ、疲れとマンネリ化が出てきます。そんな時、どうすればよかったのでしょうか。

二人で話し合っていたとき「担任も子どもも、だんだん学級目標を意識しなくなったのではないか」と気付きました。学級目標は1年間で目指す目標なので、どうしても抽象的で大きな目標になっています。もう少し、短期のめあてを立て、達成し、達成したことをみんなで確認して、次のめあてを立て…、と時間の幅を短くして取り組んではどうか、という話になりました。

学級目標は目指す「方向を示す」目標、めあては短期で目指す「到達点」と考えることもできるのではないのでしょうか。「短い期間で、その都度、初心に戻るということですね。二学期の始業式を初心に戻るチャンスにします。」と初任者からは元気な声が返ってきました。

学級担任のまなざし 45

Okayama Prefectural Education Center

R2.8.26[Wed]

「目安を示す」

前年度担任していた子どもが、休み時間、教室にいた私を訪ねてきました。「先生、私、今日初めて50メートル、泳げました！」満面の笑みです。「おめでとう！よかったね！」心からの喜びを伝えました。

前年の夏、彼女は水泳のめあてをこう綴っていました。「クロールで50メートル泳げるようになる」まわりの友達が次々と泳げるようになって、「早く自分も」という気持ちと「無理かもしれない」という気持ちが交錯しているようでした。練習が始まり、順調に30メートルくらいまでは泳げますが、その後、なかなか伸びない日が続きました。泳ぐコツを精一杯指導しましたが、泳いでも泳いでも、なかなか50メートルまで行かないのです。

ある日彼女に「昔から100回の努力という言葉があります。100回を目安に練習すればできるようになるという意味です。一つの目安として取り組んでみてはどうですか。」と話しました。彼女は、これまでに数十回練習していることを確認し、引き続き、まず5回、次の5回…、と5回ずつ練習を重ねたそうです。そして、とうとう50メートル泳げたというのです。100回までいく前に目標を達成したと話してくれました。

「100回の努力」は子どもたちを励ます言葉の一つであって、「必ず達成できる」というものではありません。また、子どもたちの中には、意欲があっても努力が続けられない子どももいます。子どもたち一人一人をよく見極め、その子に合った励ましを粘り強く続けることが大切です。いずれにしても、教員が諦めてはいけません。

学級担任のまなざし 46

Okayama Prefectural Education Center

R2.8. 27(Thu)

「ねらいを大切に」

その小学校では、毎年、6年生を送る会を行っていました。初めて1年生を担当した時、学年主任に「出し物はどうしますか。合奏はしますか。プレゼントは作りますか。」と尋ねました。いくつかアイデアがあったので「あれもしたい、これもしたい」「どうすれば盛り上がるか」とワクワクした気持ちで、学年主任の言葉を待ちました。「そうねえ…」の後、予想外の答えが返ってきました。「何をするか、より、何のためにするかを考えさせないといけないわね」私は「えっ？」と戸惑ってしまいました。

学年主任は続けます。「6年生を送る会のねらいって何だったかな?」「これまでお世話になった6年生に対する感謝の気持ちを持ち、それを伝えることです。実施計画に書いてありました。」「じゃあ、子どもたちには、まず、6年生にしてもらったことを思い出したり6年生との思い出を振り返ったりする活動をしましょう。その後、それに対する今の気持ちをみんなで集めて、その気持ちをどう伝えるか、話し合わせましょう。それを持ち寄って学年会をしませんか。」という提案でした。

翌日、話し合いをしました。「学校に行く途中、転んで血が出た時、ティッシュで押さえて、ランドセルを持ってくれた」「昼休みに一緒にサッカーをして遊んでくれた」「委員会で飼っていたうさぎを抱っこさせてくれた」などの出来事が発表され、「ありがとうという気持ちを伝えたい」「中学校に行ってもがんばってねと言いたい」「ぼくたちのことを忘れないでと伝えたい」などの意見が出ました。後はその気持ちを何で伝えるかということになり、「歌」「呼びかけ」「プレゼント」に決まりました。

6年生を送る会のねらいをもとに話し合ったので、歌と呼びかけとプレゼントで気持ちを伝えたいという意欲が高まり、主体的な活動になる予感がしました。早く放課後の学年会で学年主任に報告したいと思いました。

学級担任のまなざし 47

Okayama Prefectural Education Center

R2.8.28(Fri)

「小さなことで考える力を」

「ふ～。低学年の指導って大変ですね。あれこれ細かく言わないといけないから…」と、職員室に戻ってきた若手教員がこぼしました。「どうしたの？」と尋ねると、掃除時間が終わり教室に帰ってみると、床にゴミが落ちていたり、ほうきが出ていたり、雑巾が無造作にかけられていたり、机がそろっていなかったり、大変な状況だったそうです。そこで、一人一人にやることを割り当てて、できた子どもには次の割り当てをしているうちに、授業開始の時間になってしまったとのことでした。

自分にも同じ経験があったので、少しアドバイスをしました。「教室を短時間できれいにしたいとき、一人一人に細かくやることを割り当てれば、確かに割り当てたところはきれいになるけど、それ以上にはならないわね。例えば、こう试试看てはどうか。『教室をきれいにします。きれいにする時間は5分間です。やることはみなさんに任せます』 となるとどう思う？」「自分でやることを見つけてきれいにすると思います。やらされ感がなくて、いろいろ工夫する子どももいると思います。」「教室をきれいにするという目的のためなら何をしてもいいという自由があるところがポイントなのよ。」「何をすればいいか分からなくてじっとしている子どもはいませんか？」「友達のしていることを見るように言って、その中から選んで真似をするように助言したらどうか。言われたことだけをやるより、選んで真似をする方が一歩前進だと思うわ。」「たった5分間でも、自分で考える機会になりますね。」

小さなことでも、一年間積み重ねていけば、大きな力になります。学級担任には一年間の時間が与えられています。若手教員のみなさんは、子どもたちの言動に一喜一憂する毎日だと思えますが、1年先にどう成長してほしいか、という長い視点で子どもたちを見ることも大切にしてほしいと思います。

学級担任のまなざし 48

Okayama Prefectural Education Center

R2.8.31(Mon)

「いつもみなさんの応援団です」

初めて学級担任をしているみなさんは、なぜ教員という仕事を選んだのでしょうか。学生時代には様々な前途があったはずです。何百という仕事の中から、みなさんは教員という仕事を選びました。そして、幸いなことに、教員になることができました。

人を育てるという仕事は、やりがいのある仕事です。初めて学級担任となり、一学期を過ごしたみなさんは、子どもたちと歩んでいる学級が一步一步前に進んでいることを実感したと思います。一方で、一步一步しか前に進まないことも実感したと思います。子どもたちのためにという一心で、時間をかけて戦略を練り、万全の準備をし、全力を尽くしても、わずか1ミリしか学級が前に進まない…、そういうこともたくさんあったことでしょう。人を育てるという仕事は、そういう仕事です。

みなさんの中には、学級が上手いかず、一人悩んでいる人もいるかもしれません。初めての学級担任の時、学級が上手いかわからないのは、誰もが通る道です。恥ずかしいことはありません。一人悩んでいると心がささくれ立ってしまいます。県総合教育センターの私たちも一緒に考えます。初任研で来所したとき、いつものように声をかけてください。ネバー・ギブアップ。みなさん自身が諦めないことが一番大切です。

二学期が始まりました。教室は子どもたちが将来を生きていくために学ぶ場ですが、子どもたちが今を生きている場でもあります。教室は学級担任であるみなさんの仕事の場ですが、みなさんが今を生きている場でもあります。だからこそ、みなさんには、今を大切にして、子どもたちと一緒に、素敵な学級をつくってほしいと願っています。

県総合教育センターは、いつもみなさんの応援団です。